

「逆転の発想」

筑紫哲也氏・片山善博知事 対談内容



筑紫氏：(逆さ地図を見ながら) これはこの辺では結構見慣れている地図になっていますか、もう既に。

片山氏：そんなに普及していませんけど、ちなみに私の県庁の知事室にはこの地図は掲げてあります。



筑紫氏：すぐ思い浮かぶのは、日本語での放送で使わない様にしているのが「裏日本」という言葉で、「裏日本」というとこっちだと言われてきています。これは歴史的にみてもおかしいです。かつて高速道路は海なんですよね、北前船も日本海側を通ったし、動脈もこっちにあったのでこの地図を見ても自然ではないかと思う。

片山氏：(地図を見ながら) これ見ますと、物の見方がかなり変わってくるんです。私達の鳥取県、島根県は普通の地図を見ますと東京から遠いですし辺境という感じを受けるんですけど、こうやってみますと何となく中心に近いという感じになるんです。明治の初めの日本列島の有様を調べてみますと、人口が一番多かったのは新潟県なんです。何故かというとな新潟は米処で食料が生産できる、そこに人口が集中したんです。都市が出来始めてた頃の人口を順番に並べてみると、鳥取市は30位以内に入っているんです。戦後米ソの冷戦構造の中で国造りをした時に、明らかに太平洋側にいろんな機能や人口がシフトしていき、日本海側が寂しくなってきた。しかし、1990年代になって米ソの冷戦構造が終わって、日本海を取り巻く環境も随分変わってきた。ソ連が崩壊してロシアになったり、韓国の経済成長があったりして日本海が冷戦の狭間の海から、むしろ大陸と日本列島を結びつける役目をしだした。ここにいると我々はそれをひしひしと感じます。(中省略)

筑紫氏：今、博多と釜山の間にはフェリーがあり、これはものすごい乗船率でどんどんJRと競争して新造船を作ったりしている。そういう流れを見ると、太平洋側だけが玄関だとかいう時代ではなくなりつつある。九州でも裏側の地図を実感させる事がどんどん起きております。一方でアジアに対するゲートウェイになりたいという思いがもちろんあって、その事も進んでいます。特に中国の南の方の場所は。(中省略)

片山氏：今迄日本海に面しているのはハンディキャップを持っていました、そのハンディキャップを克服し、むしろメリットに転化しようというそういう時代だと思うんです。(中省略)

筑紫氏：外との関係もそうだし、国内の行き来もそうなんです。隣の県も結局、羽田に行こう行くのが時間距離が一番近い、なんてことがたくさんあって、横の間に連なる路線というのは日本列島って少ないんです。ところが細長い列島ですから、本当はそこが活性化すればもう少し経済効果もあるし、どういう国を造ろうとしているか、そのグランドデザインが見えない。見えないと言うと、依然として中央集権。今は分権、分権と言っておりますが、大体私はその言葉は気に入らないです。地方という言い方が大体、中央が偉くて地方がその下にあるんだ、分権も権利を分けてやる、という臭いがするじゃないですか。そういう発想では本当の逆転はおきないんじゃないかな。(中省略)

片山氏：さっき筑紫さんが言われましたけど、空気とか水とかはなかなか価値感が目に見えないのですけれど、我々が享受している、水がきれい、空気がきれい、というのは一周遅れであるかもしれないです。(中省略) 今は食の安全が大変重要になってきていますけど、そういう面で鳥取県のように自然環境が豊かな所に、例えば水を使った産業とかを持って来る。これは非常に大手の清涼飲料水メーカーが米子市のちょっと南